

時に韋提希、仏世尊を見たてまつりて、自ら瓔珞を絶ち、身を挙げて地に投ぐ。号泣して仏に向かいて白して言さく、「世尊、我、宿何の罪ありてか、この悪子を生ずる。世尊また何等の因縁ましましてか、提婆達多と共に眷属たる。

唯、願わくは世尊、我がために広く憂悩なき処を説きたまえ。我当に往生すべし。閻浮提・濁悪世をば樂わず。この濁悪処は地獄・餓鬼・畜生盈満して、不善の聚多し。願わくは我、未来に悪声を聞かじ、悪人を見じ。いま世尊に向かいて、五体を地に投げて、求哀し懺悔す。唯、願わくは仏日、我に清浄の業処を觀ぜしめることを教えたまえ」と。

(『仏説觀無量寿經』 真宗聖典九二頁)

「無憂悩処」

第15組聖明寺住職

菊地 得典

text by Norimichi Kikuchi

「世尊、我、宿^{むかし}何の罪ありてか、この悪子を生ずる。世尊また何等の因縁ましましてか、提婆達多と共に眷属たる。」これは、觀無量寿經の「厭苦縁」の韋提希の言葉です。息子である阿闍世に牢獄に幽閉され、愁憂憔悴した韋提希は、釈尊に救いを求めますが王宮に没出された釈尊を見て、自ら瓔珞を投げ捨て、身を挙げて地に投げ、号泣して釈尊に訴えているのです。ところが、韋提希の訴えはまだ続きます。「唯、願わくは世尊、我がために広く憂悩なき処を説きたまえ。我、当に往生すべし。(中略)唯、願わくは仏日、我に清浄の業処を觀ぜしむることを教えたまえ」と。善導大師は、韋提希の言葉を二つに断ち割って、前半部分を「厭苦縁」の中に、後半部分を「欣浄縁」の中に分けているのです。

「厭苦縁」の中で述べられている言葉は、まさに愚痴と恨みの言葉です。阿闍世が、父である頻婆娑羅王を幽閉し、さらに王を助けようとした韋提希まで幽閉している。それも、釈尊のいとこである提婆達多が、野心のため阿闍世に昔日の因縁(出生の秘密)を知らしめたせいである。何でこんなことにならなければならないのか。あなたは、それでも

仏なのか。恥ずかしながら、この言葉の中に、まぎれもない私自身がいます。自分の都合や思いをかなえるためには、たとえ仏であろうとも利用しようとする自分の心根が露わにされています。

ところが、「欣浄縁」で韋提希の求めたものは、「為我広説 無憂悩処」でした。現実的な解決（今までの立場を回復してほしい等）を求めずに、「無憂悩処」を求めたのです。なにが韋提希に「無憂悩処」を求めさせたのでしょうか。

同じひと続きの韋提希の言葉ですが、「厭苦縁」と「欣浄縁」の言葉の間には、沈黙の時間があり、そこに釈尊の沈黙の説法があったと言われています。沈黙ですから、釈尊を前にして、韋提希の自問自答の時間があった。それは、今まで聞いてきた教えに、わが身を問うていく時間であったと思うのです。教えにわが身を問うていくということがなければ、ただひたすら 愚痴を重ね、わが身を嘆くことにしかならない。わが身を抜きにして教えを聞いてきた、そのことが教えによって問題になっていったと思うのです。

善導大師は、人間を遇縁の存在と教えられます。縁に会うことによって形成されていくものが人間である。今、どういう者としてあるかということは、どのような縁に遇うてきたかによって決まるはずである。そして、「縁」という言葉があらわすのは、「初めから決まった固定的なものがない」という意味なのです（平野修師）。ですから、どんな縁にも遇うる。畠山明光師が言われるように、その縁が内に自覚されたとき「縁は選べない」。

韋提希は、わが子の反逆という形で、親子という根源的關係が破綻し、自分の立っている場が崩れ落ちてしまいました。起こるはずのないことが起こってしまった。そのことが、わが身ということを教えに深く問わせた。自分が期待するどの現実の延長の中にも、本当に自分が 立っていける場がない、そういう自分自身との出遇いが、「無憂悩処」を求めさせたのではないかと思うのです。

教えを聞けば聞くほど、教えられなければならない自分であるということを深く知らされます。

注：善導大師は、観無量寿経の序分を、三序六縁に分けています。